

トピックス

1. 播州日誌「吾輩は猫である」
2. 南国土佐を後にして 第5回



福留経営労務管理事務所
姫路龍馬会
社会保険労務士・行政書士
福留章

龍馬通信

No. 60

2022年12月号

大雪～冬至の候 雪景色に映える南天の実

11月8日立冬。暦の上ではもう冬、とか言っているうちに師走。光陰矢のごとしである。富士山の初冠雪、雪国からは初雪の便りが届く。あわただしく過ぎてゆく時間に戸惑いながら、師走の街を走る。

隣家の庭に南天の木があり、毎年鮮やかに真っ赤な実をつける。花はさほど言われないが、冬を待ちかねたように赤くて丸い実をつける。赤い実がめでたきの象徴として珍重され、庭木としても、正月の花のわき役としても人気がある。語呂合わせで「難を転ずる」南天（なんてん）としても人々に喜ばれる。葉は細かく分かれているが、この葉を覗いていると「鯖寿司」づくりの名人(?)であった親爺を思い出す。秋サバのうまい、秋祭りの季節。何処からか仕入れてきた形の良いサバを前に、神妙な顔、真剣な目。家族中が見守る中、正座した親爺が、サバを捌きパレットに並べる。特別に調合した甘酢に一晩寝かせる。酢飯にゴマとショウガを細かく刻んだものを入れる。サバの姿ずし。頭にもしっぽにも、しっかりと酢飯が詰められる。頭としっぽを立ててサバの姿を作る。



最後にサバの口に、南天の小さな一枝を啜えさせる。これが親爺の自慢だった。いつものひとくさり。「この南天の葉は、昔から難を転じて福となすと言うて、厄払いの意味がある」これを何度聞かされたことか。しかしその鯖寿司の味は忘れられないほどで、ごちそうの少なかつた頃でもあるので、実にほっくりと豊かな感じもした。数本を仕上げて、したり顔の親爺を思い出す。今年もあとわずか。慌ただしさの中に一抹の寂しさも。和田秀樹先生の「老人の品格」でも読んで新しい年を迎えようか……。今年の冬は厳しいとの予報。心も体も暖かくして過ごしましょう。どうぞご自愛ください。

大雪 12月7日頃

冬至 12月22日頃

『龍馬と私』 ～ 謎だらけの龍馬 ～

考えてみれば、龍馬は謎だらけの人物である。幕末に突如現れ輝かしい光芒を放って雄飛したのはわずか5年足らず。その間に果たした偉業の数々は史実として認められるとしても、一介の素浪人であった龍馬が、そうそうたる人物に伍して、活躍することができた背景は何だったのか。謎という以外にない。普通に考えて資金的なものはどうしていたのかと考える。例えば龍馬は多方面にわたって書状(手紙)を送っている。手紙一通、飛脚を使って京から土佐に送ったとして、一体どれぐらいの金(金子=きんす)が要ったのだろうか。庶民の生活の中では手紙など一生無縁のものであった時代である。残された手紙だけでも多数に上る。一体金をどう工面して

いたのか不思議である。実家が資産家で援助していたということを差し引いても、謎は残る。借金するのも派手である。また何度も破産状態に陥っている。

イロハ丸事件では、天下の御三家（紀州藩）を向こうに回して、堂々と万国公法をもって掛け合い、結果、八万三千両の賠償金を得ている。

大浦 慶という女性は、幕末に頭角を現した長崎の貿易商人（豪商）である。大浦屋は当時アメリカへの黒茶の輸出で隆盛を極めていた。龍馬は彼女からも、大枚三百両の借金をしている。無事返済したかどうかは知らない。現代流に言えば、無担保・無保証の借金である。それを可能にしたのは、悪く言えば「人たらし」。よく言えば彼の全人格的魅力的なせる技かもしれない。

とにかく謎めいた龍馬が、そこにいる。



播州日誌

「これからが、これまでを決める」

コロナ禍が続く。もう来年2月が来れば満3年になる。色々と知見が得られるとともに、見えないものに対する恐怖は薄くなったような気もする。しかしながら新規感染者の増加傾向を見ると第8波の到来は確実に予断は許されない。自分の周りでの感染やコロナ死の話もあり、未だ終息とはいかないようだ。この3年間、生活もスポーツも芸術も、街の賑わいもなく、精気を失った世界は白黒映画のようだ。非日常が日常となり、人々の生活や行動様式を変えてしまった。家で過ごすことが多くなり家食（飲み）が普通になった。このところ（11月27日）感染拡大防止に配慮しながらも、社会的活動を活性化させるということで、あらゆる規制が緩和されている。解き放たれた人々は、これまでのうっ憤を晴らさんと、観光やスポーツや芸術鑑賞に殺到している。「TVはつまらない」という声をよく聞く。大型TVが普及してTVブームの再来かと思えばさにあらず。メディアは拡張を続けSNSが通信・情報源となりBS/CS/ユーチューブ/ツイッター等チャンネルが異常に増えてしまった。TVよりユーチューブが面白いというのは常識化しつつある。誤報やフェイクニュースが蔓延している。これから先私たちは、果たしてどのような時代を生きなければならないのだろうか。

情報といえば、近くのお寺の玄関先に小さな掲示板があって、俳句や和歌や金言格言が張り出されているのを目にする。理学博士であり作家でもある藤原正彦先生が歩いていて、真宗のお寺でそれを見て、何気なく通り過ぎ10m程行き過ぎてから、「あっ」と声を出して元に戻った。そこには「これからが、これまでを決める」と書いてあった。「これまでが、これからを決める」は、原因があって結果があるという欧米型世界観である。自然科学

はすべてこれで一般的に普及している。お寺の掲示板には正反対のことが書いてあった。東洋の哲学だ。これからの生き方次第でこれまでの人生の意味が違ってくるということである。過去は変えることができないが、未来は変えることができる。多くの人はこのコロナ禍の中で、多くのことを学んだ。自分の体は自分で守るしかない。コロナ終息の先にある日常が、コロナ禍前の日常であってはいけない。

コロナ禍の先にこそ、日本人がこの白黒の時代から学んだものを発揮して、新しい国づくりをしていかなければならない。



私は「これからが、これまでを決める」の言葉を肝に銘じて、これからを生きていきたい。

2022. 11. 27

吾輩は猫である



吾輩は猫である。名前はまだない。時折人が、みーちゃんとか玉ちゃんとか勝手に言っているが、自分的には野良猫なんだから、名前などどうでもよい。それにしても今年の冬は寒さが厳しいとか、とりあえず何か所か夜露がしのげて、比較的暖かい住処を確保した。まあ、一般的に猫は寒さに弱い。いざとなれば同僚のゴールド（黄色一色のオス猫）とからだ寄せあって寝ればいい。ジェンダー時代でもあるし。

あいつ、朝6時過ぎに天川東公園に来て、深呼吸をしたりゴルフの素振りのようなことをしたり色々なストレッチをしている、あいつ。帽子を決して脱がない、あいつよ。あいつは勝手に俺のことを「ミックス」と呼んでいる。俺が三毛猫だから。2~3日に1度、様子を見に来てやるんだが、あいつ年寄りのくせに元気だぜ。ほんと。最後の腕立て伏せ50回のところでは見ているこちらの方が、ほ〜と息が詰まる。猫嫌いのあいつは、決して俺には触れないが、俺には少々親しみを感じているようだ。「おはよう」とか「さいなら、またな」と声をかけてくることがある。お前のことなんか、知るかといった風にいつも横を向いて知らん顔してやる。スタ・スタ・スタと足早に帰りかける。それを聞いて、こちとら朝食タイム。といっても、ある時もない時もあるが、まあ何とかなっている。

そうだ猫といえば、神戸新聞土曜日に「デブ猫 マル」の冒険というのが掲載されている。あいつかっこいいよな。コウノトリや恐竜に乗ったりして一寸うらやましくもある。それに「すずめの戸締り」というアニメ映画に出てくる白猫の「ダイジン」。かわいくて不思議な奴だよな。日本中の注目を集めていいよな。まあ俺の人生、きわめて一般的だけど、あいつに負けられないようにポジティブに生きてみるさ。あいつの事なんかどうでもいいけど、何となく朝になると思うんだよ、今朝は会えるかなと。何でそう思うかは、ほんと、知らんけど。



2022. 11. 27

～南国土佐を後にして～

第5回 「高知編」初恋と黒電話

昭和36年（1961年）中学1年生。この年ソ連のガガーリンが人類初の宇宙旅行（地球1周）。「地球は青かった」の名言を残した。上を向いて歩こうが坂本九の歌で大ヒット。アメリカのビルボードでも「スキヤキ」の曲名で上位にランクされた。

宇宙への関心が特に強かった訳ではないが、天体望遠鏡が欲しくてほしくてたまらない時期があった。毎日毎日学校帰りに文房具店の陳列ケースに飾られた望遠鏡を見つめてため息をついた。毎日お念仏を唱えるように買って買ってとせがみ続けて1か月。ようやく父の口から買ってやろうという言葉が出た。その瞬間、一瞬にして欲しいという気持ちが飛んでしまい、霧散した。それはちよっと不思議な感覚であった。余りにも思い詰めた事が成就した時に、場合によってはそうなるのかもしれない。結局、我が家に天体望遠鏡が来ることはなかった。

中学での部活は、迷った拳句柔道部を選んだ。ほぼ毎日練習、試合が近づくと朝練（習）があった。特に頑張ったわけでもないのでもそこそこの実力だった。高知市の体育祭で準決勝まで残ってそこで敗退。第4位というの

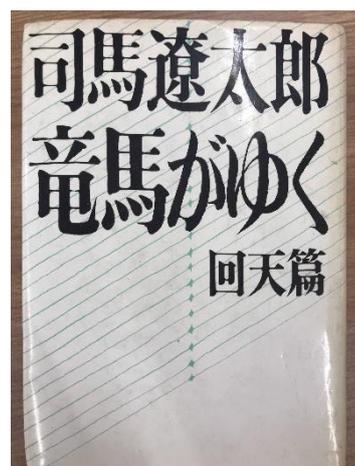
が一番の成績。忘れられないのは、学校のすぐ近くに高さ200m程の筆山という山があり、30分もあれば頂上に立てるのだが、その山道をはだして駆け上がる訓練があった。痛い痛いと声を発しながら必死で登る。何しろ下から先輩たちが竹刀をもって早く上れと追い立てるのである。頂上からの眺望は高知市街が一望でき美しかった。筆山はもともと墓山で多くの墓所が散在していた。お盆やお彼岸には多くの人が墓参りに訪れお供えをする。



今から思えば罰当たりな話であるが、その供物のお下がりを狙って、食べ物調達隊が出発し、墓参りの人が帰るのを待ちかねて供物を失礼する。まあイベントの後の清掃のようなもので、周りの大人も学校もあまり注意する事はなかった。私も恐る恐る参加したがあまり気持ちの良いものではない。饅頭やお餅、せんべいに最中、ミカンに飴類。空腹は供物の魅力に勝てなかった。夏には合宿もあった。寝るのは体育館の柔道の畳の上。数十人が雑魚寝状態であった。あまり詳しいことは書けないが、先輩から性的ないたずらをされたことがあり、今も強烈な記憶として残っている。もちろん実害やケガをしたわけではない。柔道の方は、中学3年の時筆山での訓練中に足を踏み外し2m近く転落し右足首をねん挫したのをきっかけに退部した。初段の試験の直前での挫折は残念の極みで、今も苦い思い出となっている。

初恋というのは、何歳頃からの恋心を言うのだろうか。気の多い私は、らしきものを幼稚園児の頃に経験している。色白の芝先生が好きだった。流石にこれは単なる憧れだったのだろうか。異性としての意識ということで行けば、NJさんということになる。中学の3年間を通じて交際をした。新聞社にお勤めの父親と、元教師の母親、妹が一人。ごく普通の恵まれた家庭。社宅に住んでおられた。携帯電話などまだ夢のようなもので、家には黒い固定電話、公衆電話は赤と決まっていた。今のように自由に通話やメールのやり取りというわけにはいかない時代。それにダイヤル式でプッシュホンはもう少し後の話になる。震える指で、しっかりと覚えた番号を回す。ジーコ・ジ——コ・ジ——コ。ダイヤルの音が緊張した心に響く。たいがいはお両親が出られる。「もしもし〇〇さんのお宅ですか」「同級生の福留です。〇〇さんはいらっしゃいますか」言葉尻もカチコチだ。「ああ、今変わりますね」電話口を抑えて〇〇、福留君から電話。ドタドタと階段を下りてくる音がある。そして一呼吸おいてから「〇〇です」しばらく無言。体中に熱いものがこみ上げてくる。両方から同時に「電話ありがとう」あとは次から次へと言葉が続いて長話。やがてどちらかの親から注意されて電話を切る。何しろ、3分間通話料〇〇円の時代であった。

昭和37年東京都の人口が1千万人を突破。アメリカの宇宙開発マーキュリー計画でフレンドシップ7号を打ち上げ、有人地球周回飛行に成功。宇宙分野でソ連のレベルに追いついた。この後、米・ソの激しい宇宙開発競争が始まった。6月産経新聞で司馬遼太郎の小説「龍馬がゆく」の連載開始。大学生になってから愛読書となった「龍馬がゆく」。中学2年生の時に新聞掲載が始まったというのは感慨深い。何度も何度も読んだ。歴史小説だからフィクションが入るのは仕方がない。龍馬の偽像を全国区にしたと批判する人もいるが、司馬遼太郎の想像力は暗くじめじめとした幕末の光景を明るくはつらつとしたものとして活写し、光をあてた。国民的歴史小説として多くの人に愛されたのは、彼の優れた歴史認識、想像力、洞察力に他ならない。



冬季休業のお知らせ

12月29日(木)～1月4日(水)までです。

今年もありがとうございました。良いお年をお迎えください。